

## イネばか苗病の発病株



イネばか苗病は種子伝染性病害ですので、保菌種子から生じた茎が黄化徒長します。イネは、5本くらいの苗をまとめて植えたものを「株」と扱いますから、「健全株」の中に「発病茎」が混ざっているように見えますが、株元をよく洗ってみると発病茎は根元でまとまっており（白矢印）、一つの保菌種子から生じたことが分かります。

黄化徒長した発病茎の基部は、水浸状に褐変し、不定根が発生しています（赤矢印）。このような茎の下部には白色～淡紅色のカビが見られることがあります（赤円内）。見られない場合は、よく洗った発病茎を、湿らせたティッシュペーパーとともにビニール袋に入れて1～2日置くと発生してきます。

カビをセロハンテープで移し取って顕微鏡で観察すると、フザリウム菌の大型分生子、小型分生子が見えます。大型分生子は5細胞前後からなる新月型、小型分生子は単細胞（まれに2細胞）の紡錘形～涙滴形です。小型分生子は連鎖して形成されるのが特徴です（青矢印）。

小型分生子の連鎖を確認するには、スライドガラスにセロハンテープを貼り付けるときに水などの液体を用いると連鎖が崩れてしまうので、そのまま乾式で貼りつけるのがコツです。